

二宮東遺跡

第3次調査

発掘調査報告書

2010

神戸市教育委員会

二宮東遺跡
第3次調査
発掘調査報告書

2010

神戸市教育委員会

序

二宮東遺跡は明治4年に付け替えられた新生田川の西岸に接した、山手幹線沿いに位置する遺跡です。平成15年に新たに発見された遺跡でもあります。

近年における発掘調査の増加で、市街地でも多くの遺跡が発見され続けています。市街地の広がる中央区でも、この例に違わず多くの遺跡が発見され、縄文時代から歴史時代まで多くの痕跡が確認されています。

二宮東遺跡も、この様な流れのなかで発見された遺跡であり、本書が地域の歴史研究の一助となる事を願っています。

この報告書では、マンション建設に先立ち実施した、発掘調査の報告を行います。この報告書により地域の歴史に興味を持ち、埋蔵文化財への理解を深め、市民の皆様に広く活用頂ければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および報告書の作成にご協力いただきました、事業主である株式会社プレサンスコーポレーションをはじめ、関係諸機関に対し、厚く御礼申し上げます。

平成22年3月

神戸市教育委員会

例　　言

1. 本書は、神戸市中央区二宮町1丁目381番6、381番7に所在する二宮東遺跡第3次発掘調査地点の調査報告書である。
2. 今回の調査は、マンション建設に伴うもので、神戸市教育委員会が、株式会社プレサンスコーポレーションからの委託を受けて実施した。対象面積は約300m²（150m²×2面）である。現地調査は平成21年7月22日から平成21年9月11日にかけて実施し、その後、神戸市埋蔵文化財センターにて、出土遺物の整理と報告書の作成を行った。
3. 現地調査と報告書の作成は神戸市教育委員会学芸員 浅谷 誠吾が担当した。
4. 現地での遺構写真撮影は浅谷が行った。遺物写真撮影は、独立行政法人奈良文化財研究所 牛嶋 茂氏の指導の下、杉本 和樹氏（西大寺フォト）が行った。
5. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「神戸首部」と、神戸市発行の2千5百分の1地形図「新神戸駅」を使用した。
6. 本書に使用した方位と座標は、平面直角座標世界測地系で、標高は、東京湾平均海水面（T.P.）で示した。
7. 現地の発掘調査作業は、有限会社和田発掘調査所に委託して実施した。
8. 現地調査および遺物の整理、報告書の刊行にあたっては、株式会社プレサンスコーポレーションの協力を得て実施しました。ここに記して感謝いたします。
9. 縄文時代の土器と遺構については、立命館大学 矢野 健一教授に、ご指導とご助言をいただきました。記して感謝いたします。

目 次

序	
例言	
口次	
第1章 はじめに	1
第1節 二宮東遺跡の立地と歴史的環境	1
1) 遺跡の立地	1
2) 歴史的環境	2
第2節 二宮東遺跡の概要	4
第3節 調査に至る経緯と経過	5
1) 調査に至る経緯	5
2) 調査組織	5
3) 調査の経過	5
第2章 遺構と遺物	7
第1節 調査の概要	7
1) 調査の方法	7
2) 基本順序	7
第2節 第1遺構面	8
1) 遺構と遺物	8
第3節 第2遺構面	11
1) 遺構	11
2) 遺物	14
第3章 まとめ	22
第1節 占墳時代	22
1) 大溝について	22
2) 遺物について	22
第2節 純文時代早期	22
1) 遺構について	22
2) 遺物について	23

挿図目次

図1 二宮東遺跡の位置	1	図11 縄文時代早期中層 第2遺構面検出遺構出土土器	15
図2 二宮東遺跡と周辺の遺跡	3	図12 縄文時代早期下層 早期下層～最下層出土土器	16
図3 二宮東遺跡調査地点	4	図13 縄文時代早期下層～最下層 早期最下層出土土器	17
図4 調査区設定図	5	図14 縄文時代早期石器	18
図5 基本層序	7	図15 縄文時代早期石器	19
図6 第1遺構面平面図	8	図16 縄文時代早期楔型石器 削器	20
図7 SD101 平面図 土層断面図	9	表目次	
図8 SD101 中層出土遺物	10	表1 石器重量計測表	23
図9 第2遺構面平面図	12	挿図写真目次	
図10 第2遺構面検出遺構平面図 土層断面図	13	写真1 SD101 中層上部出土須恵器	10

写真図版目次

写真図版1

- 1 区第1遺構面全景（南から）
- 2 区第1遺構面全景（北から）

写真図版2

- 1 SD101（南から）
- 2 SD101南壁土層

写真図版3

- 1 区第2遺構面全景（南から）
- 2 A区第2遺構面全景（北から）

写真図版4

- 1 2A区北半第2遺構面全景（南から）
- 2 2B区第2遺構面全景（北から）

写真図版5

- 1 2A区東壁土層
- 2 SX201（西から）
- 3 SK201（東から）

写真図版6

- 1 SK202（南から）
- 2 SK203（北から）
- 3 1A区無遺物層上面（南から）

写真図版7

- SD101出土土器
- SD101出土土鉢

写真図版8

縄文時代早期中層出土土器

写真図版9

縄文時代早期下層出土上上器

写真図版10

縄文時代早期下層～最下層出土土器

写真図版11

縄文時代早期最下層 遺構出土土器

写真図版12

縄文時代早期石器

写真図版13

- 縄文時代早期楔型石器 削器
- 縄文時代早期下層出土サスカイト剥片（一部）

第1章 はじめに

第1節 二宮東遺跡の立地と歴史的環境

1 遺跡の立地

二宮東遺跡は、神戸市中央区二宮町1丁目に存在する遺跡である。現在では、主要交通機関の集中するJR三宮駅の周囲から、北東約1kmの市街地内に位置する。

調査地周囲の道路における現標高は、約23.2m～23.7mである。北から南へと下る、緩斜面に位置している。

現在の生田川は、暴れ川と呼ばれた旧生田川が明治4年に付け替えられ、新生田川に接した西岸に存在する遺跡となる。

この二宮東遺跡は、生田川流域に存在する遺跡と理解できる。新神戸駅の南方から南西方向に向き、統いて神戸市役所の存在するフラワーロードを流れていた、旧生田川の東岸に位置している。

旧生田川により形成された河岸段丘上に存在する遺跡であり、高橋学氏の地形図では、段丘Ⅰ面に位置している。

遺跡は北側に広がる六甲山系と海岸部の約2kmの幅内に存在する、典型的な六甲南麓の地形条件のなかに位置している。多くの河川が六甲山系を南へ流下し、山地を浸食し、段丘と扇状地を形成している。

二宮東遺跡をはじめ多くの遺跡は、この段丘、扇状地上に位置している。

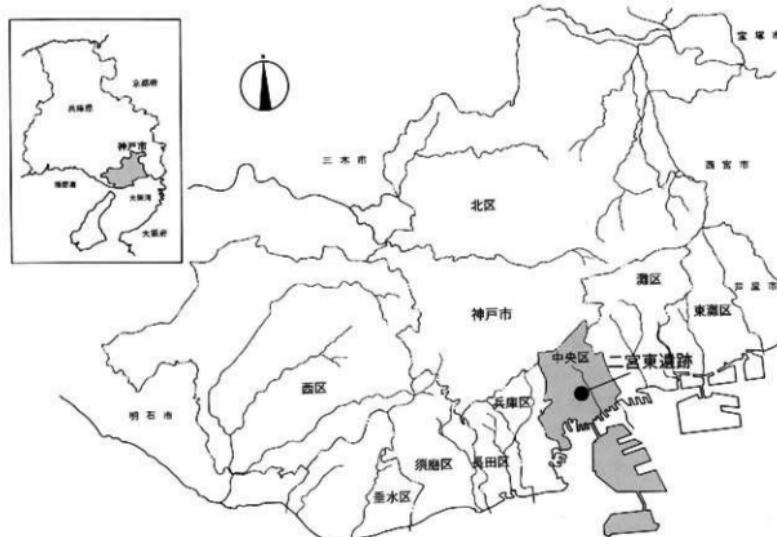


図1 二宮東遺跡の位置

2 歴史的環境

縄文時代

熊内遺跡⁽¹⁾で縄文時代早期の竪穴住居が確認されている。他に中期末～後期にかけての土坑、晚期の遺物も多く確認されている。各時期に集落が存在した事は確実である。雲井遺跡⁽²⁾でも縄文時代早期の集石造構や土坑が確認されている。また晚期の土器棺⁽³⁾も確認され、集落が存在する事が確認できる。宇治川南遺跡⁽⁴⁾では、旧河道から早期～晚期の遺物が出土し、縄文時代集落の存在が強く想定されている。生田遺跡⁽⁵⁾では後期の多量の土器等に伴い、竪穴住居や上坑等が確認され、集落の存在が確定している。

また距離的に離れるが、攝播の国境を流れる境川付近で押形文土器が確認され⁽⁶⁾、付近に早期の集落が想定できる。東灘区の西岡本遺跡⁽⁷⁾でも早期の竪穴住居が確認され、集落が存在する。

弥生時代

雲井遺跡⁽⁸⁾で縄文晩期から続き、弥生前期の遺構が多数検出され、遺跡内に広く集落が広がっていた事が理解できる。この雲井遺跡⁽⁹⁾では中期の方形周溝墓群も確認されている。宇治川南遺跡⁽¹⁰⁾でも旧河道から前期の上器が出土している。生田遺跡⁽¹¹⁾では中期に竪穴住居や方形周溝墓が検出され、集落が開始される。丘陵上では布引丸山遺跡⁽¹²⁾も中期に開始する。

弥生後期は周囲で遺跡の増加する時期である。熊内遺跡⁽¹³⁾で大規模な二重環濠が確認され、環濠集落が存在している。日暮遺跡⁽¹⁴⁾でも後期末の竪穴住居が確認された他、中山手遺跡⁽¹⁵⁾でも後期に多数の土坑等が確認され、集落が存在している。

古墳時代

熊内遺跡⁽¹⁶⁾で前期の竪穴住居が確認された他、後期の土坑墓、木棺墓も確認されている。生田遺跡⁽¹⁷⁾でも中期末に始まり後期に広がる竪穴住居と掘立柱建物が多く確認され、集落の存在は明らかである。日暮遺跡⁽¹⁸⁾では中期の竪穴住居が確認されている。下山手遺跡⁽¹⁹⁾でも、古墳時代後期の掘立柱建物群が確認されている。雲井遺跡⁽²⁰⁾と二宮遺跡⁽²¹⁾でも後期の柱穴や土坑等が多く確認され、集落が存在している。

古墳は中宮古墳⁽²²⁾や中宮黄金塚古墳⁽²³⁾の存在が知られている。他に生田古墳等⁽²⁴⁾の古墳が存在していたらしいが、詳細は不明である。

奈良時代

日暮遺跡⁽²⁵⁾では掘立柱建物が確認されている。位置的にも山陽道との関連が想定できる遺跡である。二宮遺跡⁽²⁶⁾では竪穴住居や掘立柱建物の他、铸造遺構が確認されている。また、流路から土馬等も出土している。雲井遺跡⁽²⁷⁾でも奈良時代の柱穴群を確認しており、古墳時代後期から引き続き集落が営まれている。他に旧三ノ宮駅構内遺跡⁽²⁸⁾では奈良時代の上器が多量に出土している。確実な遺構は検出されていないが、周囲に集落が存在する事は明らかである。

平安時代

日暮遺跡⁽²⁹⁾で掘立柱建物群が確認され集落が存在する。また下山手遺跡⁽³⁰⁾では掘立柱建物群に伴い園池遺構も確認され、地元有力者の館跡と推定されている。

鎌倉時代以降

元町遺跡⁽³¹⁾や吾妻遺跡等⁽³²⁾で柱穴が確認され、鎌倉時代集落が開始されている。宇治川南遺跡⁽³³⁾でも平安時代末～鎌倉時代の柱穴等が確認され、集落が存在する。

室町時代以降では城郭の存在が知られている。滝山城⁽³⁴⁾や花隈城⁽³⁵⁾が存在しているが、共に詳細は確認できていない。



- 1 二宮東遺跡 2 熊内遺跡 3 舟井遺跡 4 二宮遺跡
 5 生田町古墳群 6 日暮遺跡
 7 吾妻遺跡 8 布引丸山遺跡 9 滅山城跡 10 中山手遺跡
 11 生田遺跡 12 旧三宮駅構内遺跡
 13 花隈城跡 14 中宮黄金塚古墳 15 下山手北遺跡 16 下山手遺跡
 17 宇治川南遺跡 18 元町遺跡

図2 二宮東遺跡と周辺の遺跡

第2節 二宮東遺跡の概要

二宮東遺跡は、平成15年度にマンション建設に伴う試掘調査で初めて確認されている。比較的最近になり発見された遺跡である。現在に至るまで二度の調査が実施され、今回が3次調査となる。

まだ調査例も少なく、遺跡の概要も未だ詳細は解明できていない。

1次調査は平成15年度に実施され、弥生時代後期の溝、時期不明の土坑と構列を伴う柱穴を確認している。この調査により、弥生時代、古墳時代、奈良時代の3時期の遺跡である事が判明した。

2次調査は平成17年度に実施され、古墳時代後期の大溝と時期不明の柱穴が確認されている。また遺物では、弥生後期の土器と共に古墳時代後期、奈良時代の土器も出土している。

今回実施した平成21年度の調査が3次調査となり、位置的には2次調査に接した東隣である。詳細は第2章で述べるが、2次調査で確認した古墳時代の大溝の続きと時期不明の柱穴を確認した他、下層から新たに縄文時代早期の遺構と遺物を確認し、縄文時代早期集落の存在も明らかとなった。



図3 二宮東遺跡調査地点

第3節 調査に至る経緯と経過

- 1 調査に至る** 今回の調査対象地は神戸市埋蔵文化財分布図に記載されている、二宮東遺跡の範
　　経緯 囲内であり、試掘調査の結果、埋蔵文化財が確認された。試掘調査の結果を受けて、
　　事業主である株式会社プレサンスコーポレーションと協議を行い、マンション建設
　　により埋蔵文化財が影響を受ける約150m²の範囲について発掘調査を実施した。
- 2 調査組織** 神戸市文化財保護審議会 史跡考古担当委員
　　工樂 善通 大阪府立狭山池博物館館長
　　和田 晴吾 立命館大学教授
　　神戸市教育委員会事務局
　　教育長 橋口 秀志
　　社会教育部長 大寺 直秀
　　教育委員会参事 柏木 一孝
　　社会教育部主幹 渡辺 伸行
　　埋蔵文化財指導係長 丸山 肇
　　埋蔵文化財調査係長 千種 浩
　　文化財課主査 丹治 康明 安田 滋 斎木 嶽
　　調査担当学芸員 浅谷 誠吾
　　保存科学担当学芸員 中村 大介
　　遺物整理担当学芸員 黒田 基正 佐伯 二郎

- 3 調査の経過** 平成21年7月22日から、調査を開始した。初日はグリッド4カ所の調査を実施し
た他、調査区を東西に区分し、東側の2区の重機掘削を実施した。その後、人力により調査を実施し、第1遺構
面は7月29日に調査を終了し
た。

調査の経過に伴い、下層に
縄文時代早期の遺物包含層が
存在する事を、新たに確認
した。この下層については、
残土の土量の関係で2区を南
北に2A区、2B区に区分し
た。調査の進行に伴い、縄文
時代早期の遺構を確認し、2
A区で第2遺構面の調査は8
月7日に終了し、より下層の
無遺物層までの掘削は8月18
日に終了している。2B区の
第2遺構面の調査は8月20日

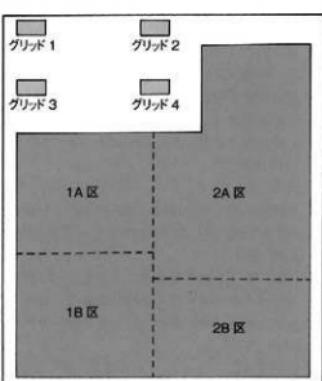


図4 調査区設定図

に終了し、下層の無遺物層までの掘削は8月21日に終了している。

引き続き1区の調査にかかり、8月24日に重機掘削を実施した。第1遺構面の調査は8月27日に終了した。第2遺構面の調査は8月31日に終了している。より下層については残土の土量の関係で南北に1A区、1B区に区分し、1B区の調査を9月3日に終了している。引き続き1A区の調査を実施し、9月9日に無遺物層までの掘削を終了した。

翌9月10日～11日に調査区の埋め戻しを実施し、11日に株式会社プレサンスコーポレーションに現地の引渡しを行い、現地調査は終了している。

出土遺物と資材は神戸市埋蔵文化財センターに搬入し、報告書の作成に向けて、出土遺物及び写真、図面等の整理作業を行った。

1 注

- (1) 安田 淩他「堀内遺跡第3次調査発掘調査報告書」2003 神戸市教育委員会
- (2) 安田 淩「雲井遺跡第4次調査」「平成3年度神戸市埋蔵文化財年報」1994 神戸市教育委員会
- (3) 丹治康明「雲井遺跡第1次発掘調査報告書」1986 神戸市教育委員会
- (4) 丹治康明他「宇治川南遺跡」「昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報」1986 神戸市教育委員会
- (5) 中谷 正化「生田遺跡第4次発掘調査概要」2006 神戸市教育委員会
- (6) 石野博信著「紀文時代の兵庫」1978 兵庫考古学研究会
- (7) 浅岡俊夫編「神戸市東灘区西岡本遺跡」2001 六甲山麓遺跡調査会
- (8) 前掲 (3)
- (9) 前掲 (3)
- (10) 前掲 (4)
- (11) 前掲 (5)
- (12) 小林行雄「神戸市布引丸山の弥生土器」「考古学」6巻3号 1935 東京考古学会
- (13) 前掲 (1)
- (14) 山本雅和他「日暮遺跡第4次調査」「平成3年度神戸市埋蔵文化財年報」1994 神戸市教育委員会
- (15) 木戸雅好他「中山手遺跡第2次調査」「平成9年度神戸市埋蔵文化財年報」2000 神戸市教育委員会
- (16) 前掲 (1)
- (17) 前掲 (5)
- (18) 谷 正俊他「日暮遺跡発掘調査報告書」1989 神戸市教育委員会
- (19) 鹿井直正、藤本史子他「神戸市下山手遺跡」2004 大手前大学史学研究所
- (20) 富山直人「雲井遺跡第10次調査」「平成8年度神戸市埋蔵文化財年報」2001 神戸市教育委員会
- (21) 谷 正俊「二宮遺跡第1次調査」「平成10年度神戸市埋蔵文化財年報」2001 神戸市教育委員会
- (22) 新修神戸市史編纂委員会編「新修神戸市史歴史編1 古史考古」1989 神戸市役所
- (23) 菅本宏明他「中宮黄金塚古墳」「昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報」1994 神戸市教育委員会
- (24) 木村次男「小林行雄「銛子發見の神戸市生田古墳」「考古学雑誌」20巻6号 1930 考古学会
- (25) 前掲 (14)
- (26) 前掲 (21)
- (27) 西岡巧次他「雲井遺跡（第8次調査）－震災復興に伴う彌生文化財発掘調査概要－」1998 神戸市教育委員会
- (28) 菅本宏明他「旧三宮駅構内遺跡」「平成2年度神戸市埋蔵文化財年報」1993 神戸市教育委員会
- (29) 前掲 (18)
- (30) 紫藤 宏「下山手遺跡第2次調査」「平成17年度神戸市埋蔵文化財年報」2008 神戸市教育委員会
- (31) 村尾正人他「元町遺跡発掘調査概報」1991 滋賀文化財協会
- (32) 古川久雄他「神戸市中央区吾妻遺跡第2次調査」1994 六甲山麓遺跡調査会
- (33) 前掲 (4)
- (34) 田部美智雄「竈山城」「日本城郭体系 第12巻 大阪兵庫」1981 新人物往来社
- (35) 田部美智雄「花隈城」(34)と同じ
- 山口英正「花隈城跡」「平成18年度神戸市埋蔵文化財年報」2009 神戸市教育委員会

第2章 遺構と遺物

第1節 調査の概要

1 調査の方法 今回の調査は、マンション建設に伴い埋蔵文化財が影響を受ける部分について実施している。搅乱土についてバックホーで掘削を実施した後、人力により調査を実施した。遺構平面図と土層図については1/20で図化している。

搅乱土の直下が古墳時代の第1遺構面であり、より下層には縄文時代早期の遺物包含層が4層確認できた。縄文時代早期上層、縄文時代早期中層、縄文時代早期下層、縄文時代早期最下層と区分している。縄文時代早期下層を基盤層として、縄文時代早期の第2遺構面を確認している。

調査進行上、調査区西半を1区、東半を2区とし、この1区2区のそれぞれ北半をA区、南半をB区としている。計4分割の調査となった。また、グリッド1からグリッド4までの調査も併せて実施している。

2 基本層序 調査地の現標高は、約22.8mを前後している。搅乱土の直下が第1遺構面であり、標高は、約22.3mを測る。より下層には灰褐色砂質土（縄文時代早期上層）、茶褐色砂質土（縄文時代中期中層）、褐色砂質土（縄文時代中期下層）、淡褐色砂質土（縄文時代中期最下層）と、4層の縄文時代早期遺物包含層が堆積している。より下層には無遺物層である褐色砂質土が堆積している。

褐色砂質土（縄文時代中期下層）を基盤層として、第2遺構面を検出した。標高は、約22.0mを測る。また、褐色砂質土（無遺物層）の上面は、標高約21.5mである。

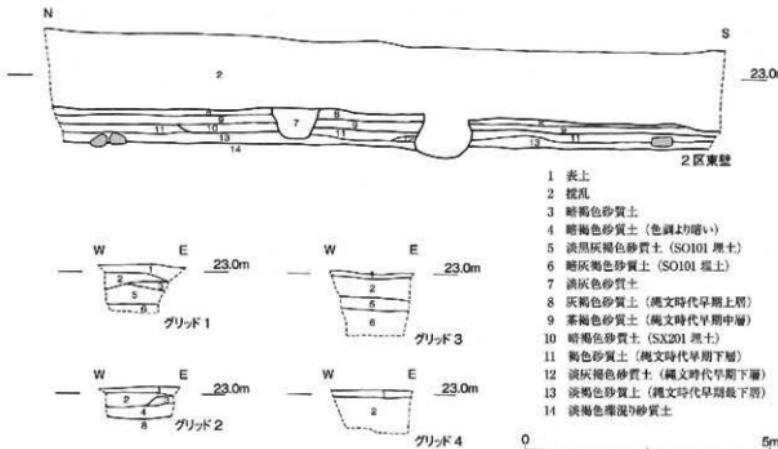


図5 基本層序

第2節 第1遺構面

1 遺構と遺物 古墳時代に形成された遺構面で、大溝1条と柱穴、落ち込みを検出した。

SD101 1区の西端で確認した大溝であり、溝の東半分だけを検出している。幅約3.2m以上で、深さ約1.5mを測り、ほぼ南北方向に直線的に伸びている。溝壁面の傾斜も比較的急勾配であり、人為的に掘削された溝と考えられる。

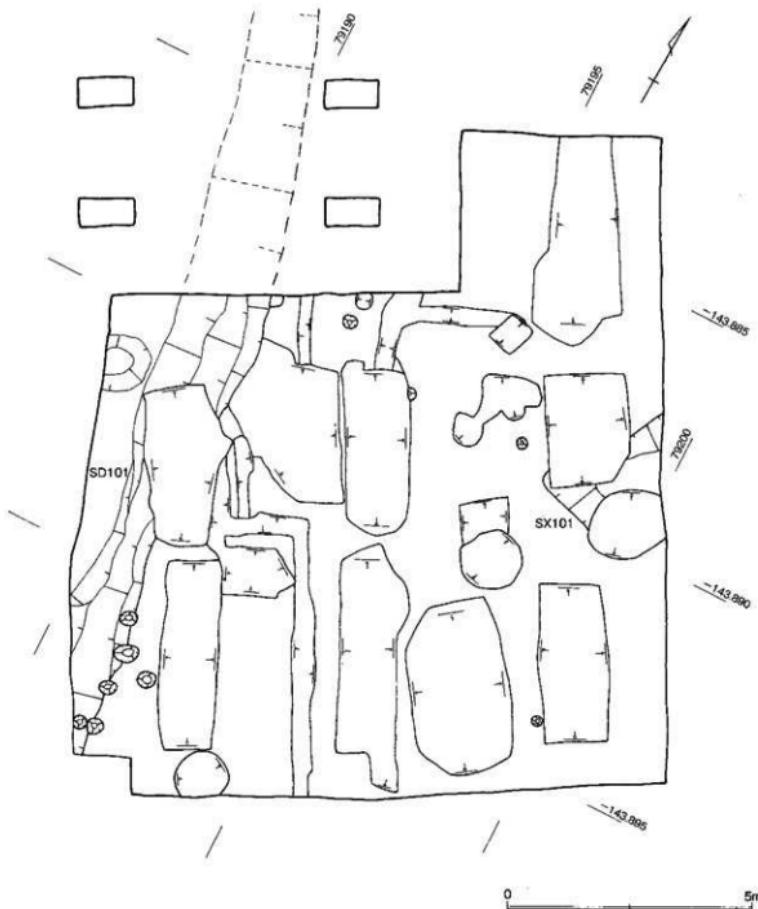


図6 第1遺構面平面図

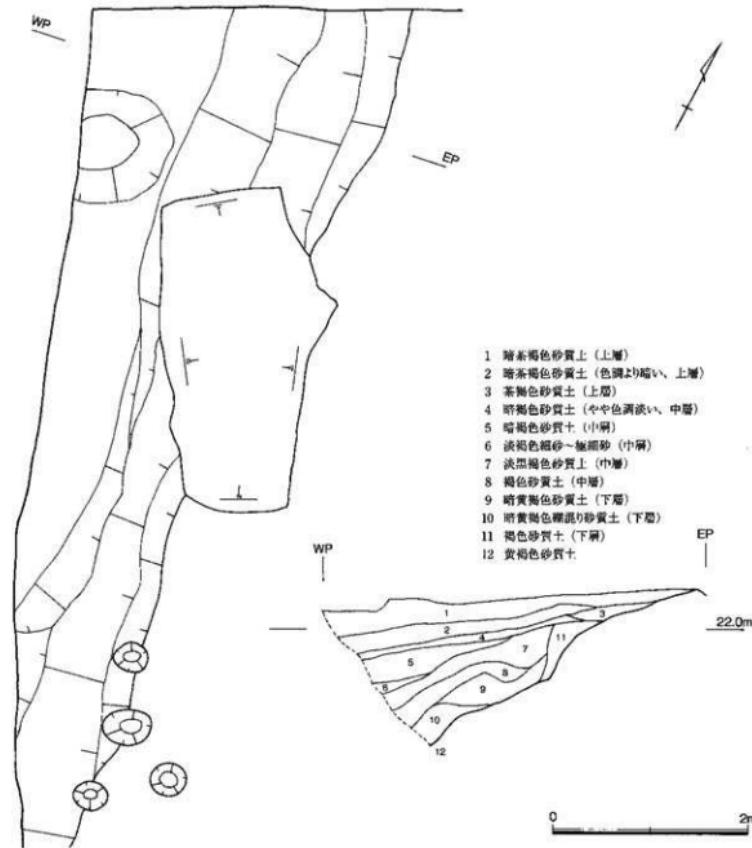


図7 SD101 平面図 土層断面図

この大溝の北側延長線上に、グリッド1からグリッド4を設定している。このうち西側に設定したグリッド1とグリッド3では大溝の堆積土層が確認されている。より東側に設定したグリッド2では古墳時代の造構面が確認されている。同じく東側に設定したグリッド4では工事影響深度以下まで搅乱されており、造構は存在していないなかった。

このグリッド調査の結果から、大溝が引き続き北方向に伸びている事実は確認できた。

調査は、便宜的に暗茶褐色砂質土～茶褐色砂質土の堆積する上層、暗褐色砂質土、淡黒褐色砂質土、褐色砂質土の堆積する中層、暗黃褐色砂質土の堆積する下層に3区分して実施した。

上層では遺物の出土量は少ないが、土師器と共に時期不明の須恵器が小さな破片で出土している。

中層は遺物の出土量が最も多い。ほとんどが土師器片であるが、古墳時代後期頃の須恵器片も少量混じっている。時期の判断できる遺物では、中層上部から7世紀頃の須恵器杯が出土している。他に、この中層から土鍤が15点出土している。

下層の遺物も出土量は比較的少なく、また、細かな破片ばかりである。出土遺物は土師器だけであり、須恵器は出土していない。

下層には須恵器を含まないこ

とから、SD101の掘削時期は古
墳時代前期に遡る可能性も考
えられる。中層の堆積時期も大溝
はまだ機能していたと考えられ
る。中層上部から7世紀頃の須
恵器杯が出土した事実から、大
溝の埋没時期はその頃と推定で
きる。



写真1 SD101 中層上部出土須恵器

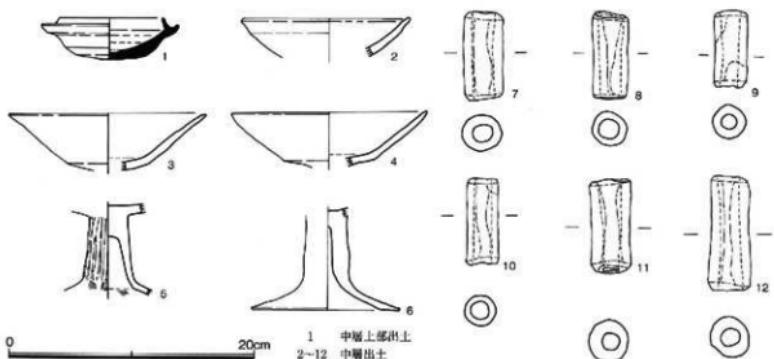


図8 SD101 中層出土遺物

柱穴群

1区のSD101周囲で多くの柱穴を確認した他、2区にも柱穴が散在している。計10基を検出した。ただし建物や柵列としての機能的な配列にはなっていない。

柱穴はすべて径約26cm~38cmに収まる。深さはSP101を除き、約12cm~20cmの範囲に収まる。SP101だけは、深さ約53cmを測る。

埋土はすべて淡灰褐色砂質土であり、遺物は出土していない。そのため、柱穴の正確な時期は不明である。

SX101

2A区で確認した。搅乱を受けているが、不整形の落ち込みに復元できる。径約60cm以上×116cm以上で、深さ約32cmを測る。柱穴と同じ灰褐色砂質土が堆積し、遺物は出土していない。このため、落ち込みの正確な時期と性格は不明である。

第3節 第2遺構面

- 1 遺構** 褐色砂質土（縄文時代早期下層遺物包含層）を基盤層として確認した縄文時代早期の遺構面である。遺構は土坑、ピット、落ち込みを検出した。これらの遺構の主体は2区にあり、1区はピットが散在する程度である。
- 第2遺構面は、第1遺構面より約30cmの間層を挟んでいる。
- SK201 1A区と2A区の境界線上で検出した、不整円形の土坑である。径約40cm×66cmで、深さ約17cmを測る。暗茶褐色砂質土の單一土層が堆積している。
- 遺物は縄文時代早期の土器が少量出土した他、石鐵が1点とサスカイト剥片が出土している。
- SK202 1A区で検出した不整円形の土坑である。径約88cm×106cmで、深さ約25cmを測る。淡褐色砂質土の單一土層が堆積している。縄文時代早期の土器が少景出土している。
- SK203 2B区で検出した。北側を搅乱により削平されるが、不整円形と復元できる土坑である。
- 径約42cm×54cm以上で、深さ約13cmを測る。暗茶褐色砂質土の單一土層が堆積している。遺物は縄文時代早期の土器が細かな破片で出土している。
- SX201 2A区の東端部で確認した、不整円形の浅い落ち込みである。遺構の西側だけを調査し、東側は調査区外に広がっている。
- 落ち込みは径約2.6m×0.9m以上を測り、深さは約20cmを測る。暗褐色砂質土の單一土層が堆積している。
- 遺物は縄文時代早期の土器が比較的多く出土した他、石鐵1点とサスカイト剥片が多く出土している。
- 西側部分だけの調査であり詳細は不明であるが、落ち込みの肩周囲にピットも確認され、あるいは竪穴住居である事も、可能性として考えられる。
- ピット群** 24基のピットを検出している。ピット群の主体は2区に存在し、1区では2基のピットを確認しただけである。
- これらのピットは径約16cm～40cmで、深さ約5cm～20cmを測る。比較的浅いピットが多い。茶褐色砂質土～灰茶褐色砂質土が堆積し、11基のピットから縄文時代早期の土器の細かな破片やサスカイト剥片が出土している。
- これらのピットには柱穴や杭痕が含まれるであろうが、個々のピットを結びつける機能的な繋がりは、確認できなかった。
- SP201 径約26cmで、深さ約8cmを測るピットであり、灰茶褐色砂質土が堆積している。遺物はサスカイト剥片が出土している。
- SP202 径約24cm×32cmで、深さ約9cmを測るピットであり、灰茶褐色砂質土が堆積している。遺物はサスカイト剥片が出土している。
- SP203 径約20cmで、深さ約8cmを測るピットであり、茶褐色砂質土が堆積している。遺物は出土していない。
- SP204 径約28cmで、深さ約19cmを測るピットであり、灰茶褐色砂質土が堆積している。縄文時代早期の土器の細かな破片が、比較的多く出土している。

- SP205 径約26cm×40cmで、深さ約15cmを測るピットであり、灰茶褐色砂質土が堆積している。縄文時代早期の土器の細かな破片が、比較的多く出土している。
- SP206 径約20cmで、深さ約8cmを測るピットであり、灰茶褐色砂質土が堆積している。縄文時代早期の土器の細かな破片が、比較的多く出土している。
- SP207 径約32cmで、深さ約11cmを測るピットであり、灰茶褐色砂質土が堆積している。サヌカイト剥片と縄文時代早期の土器の細かな破片が出土している。
- SP208 径約34cmで、深さ約19cmを測るピットであり、灰茶褐色砂質土が堆積している。縄文時代早期の土器の細かな破片が、比較的多く出土している。
- SP209 径約32cmで、深さ約10cmを測るピットであり、茶褐色砂質土が堆積している。縄文時代早期の土器の細かな破片が、比較的多く出土している。

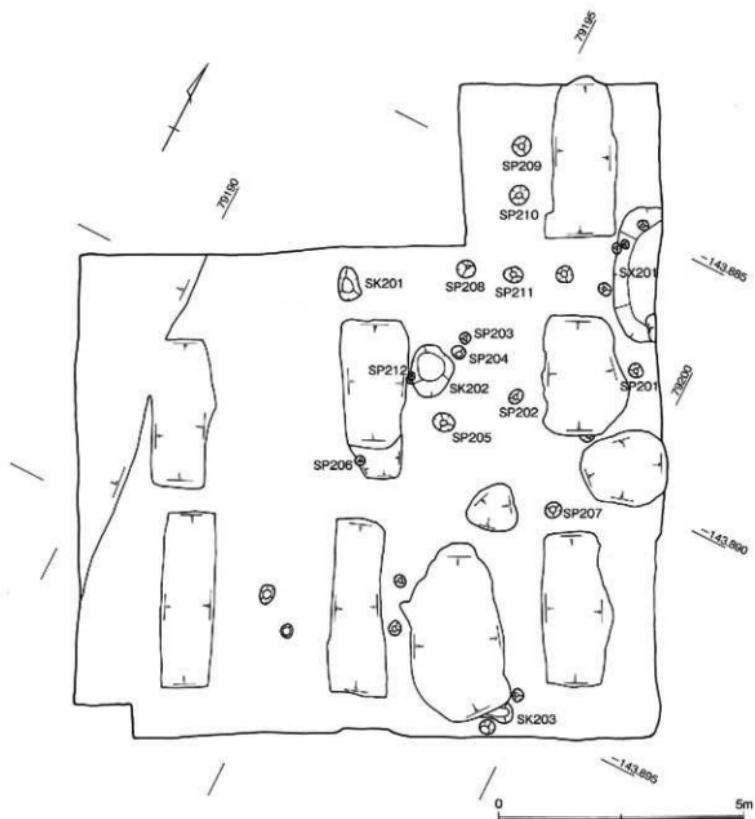


図9 第2遺構面平面図

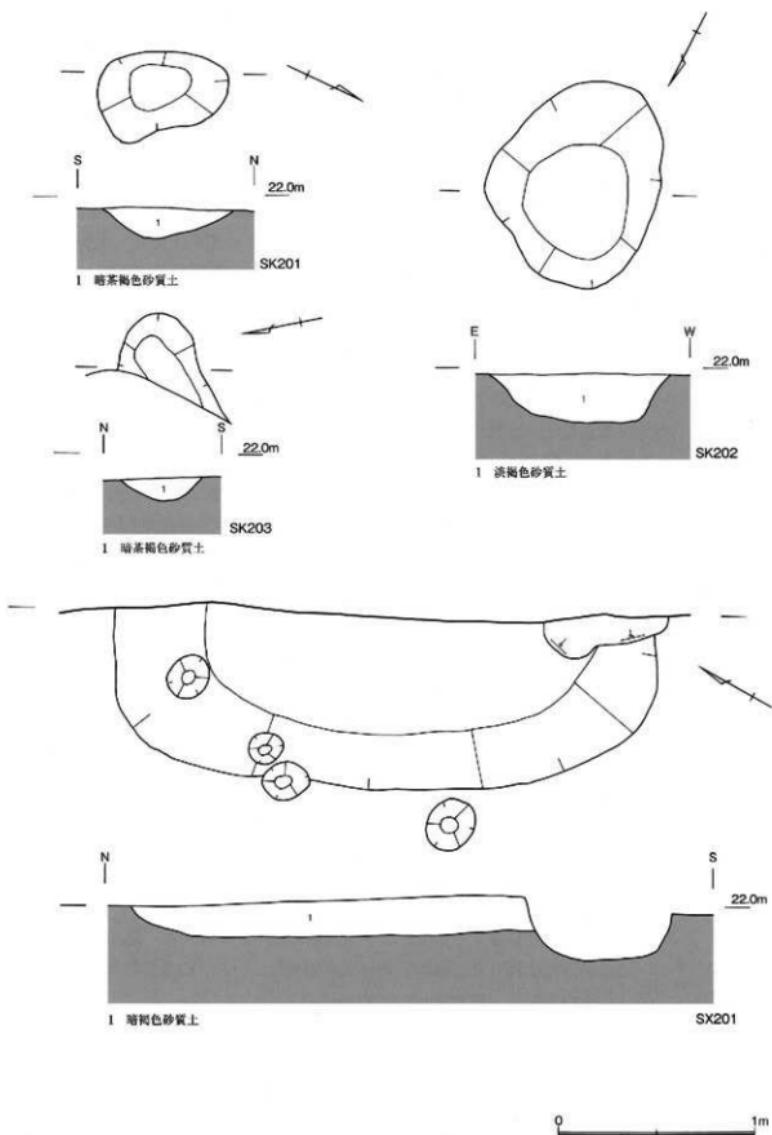


図10 第2造構面検出造構平面図 土層断面図

SP210	径約40cmで、深さ約6cmを測るビットであり、灰茶褐色砂質土が堆積している。縄文時代早期の土器の細かな破片が出土している。
SP211	径約30cm×40cmで、深さ約15cmを測るビットであり、灰茶褐色砂質土が堆積している。縄文時代早期の土器の細かな破片が出土している。
SP212	SK202により、削平を受ける。復元すると、径約31cmで、深さ約16cmを測るビットである。灰茶褐色砂質土が堆積し、サスカイト剥片が出土している。
2 遺物	第2遺構面で検出した遺構から出土した遺物と共に、上層、中層、下層、最下層と4層の縄文時代早期遺物包含層から出土した遺物も含めて述べる。
a 土器	125点を図化した。内訳を層位順に述べると、中層出土33点（1～33）、遺構出土10点（34～43）、下層出土32点（44～75）、下層～最下層出土32点（76～107）、最下層出土18点（108～125）である。上層出土土器は小破片が少景出土しただけであり、図化し得なかった。
	これらの土器は主に山形文を主体とする押型文土器であり、上層～最下層まで基本的に縄文時代早期神並上層式の範疇に収まる。
	確認している限りでは、ネガティブ文は出土していない。また、層位の違いによる明確な型式差も認められない。
	山形文は先鋭的な山形に屈曲するタイプから、緩い波状の山形に屈曲するタイプ、ほとんど直線に近い山形文を施文するタイプ等、数種類のバリエーションが認められ、今回の出土資料は個体のバリエーションが多い資料である事が理解できる。また出土数は少ないが、綾杉文にもバリエーションが認められる。
	山形文の確認できる個体では、横方向の施文後に縱方向に施文する例が多く認められる。また、主に三条を…単位とする長さ2cm～3cmの原体で施文されている例が多い。
	山形文を施文された個体については、口縁部は波状口縁に復元できる様である。
	他に、平行線文、綾杉文も少量だが確認できる。この平行線文が神並上層式に共伴する事実が確認できた事は、一つの調査成果である。
	内面は調整を確認できるすべての個体で、丁寧にナデ調整が施されている。
	胎土はすべての土器で、角閃石が多く認められる。神宮寺式～神並上層式の特徴であり、周囲の遺跡では雲井遺跡や熊内遺跡でも大川式～神宮寺式、神並上層式で胎土に角閃石が認められる。
中層	1～2は平行線文である。3～8は綾杉文で、この内4～6、8は口縁部となる。口縁部外面に刻み目を持ち、刺突文も施されている。口縁部外面に刻み目を持つ例は、北白川廃寺下層遺跡 ⁽¹⁾ に類例がある。
	以下9～33は数種類のバリエーションが存在するが、すべて山形文である。24には山形文と共に刺突文が施されている。33は山形文が斜めに施されている。北白川廃寺下層遺跡 ⁽²⁾ 等に類例がある。
遺構	38は平行線文である。他の34～37、39～43はバリエーションが存在するが、すべて山形文である。この内42は口縁部である。



図11 桶文時代早期中層 第2遺構面検出遺構出土土器



図12 橋文時代早期下層 早期下層～最下層出土土器



91~107 縄文時代早期下層～最下層出土上
108~125 縄文時代早期最下層出土

0 10cm

図13 縄文時代早期下層～最下層 最下層出土土器

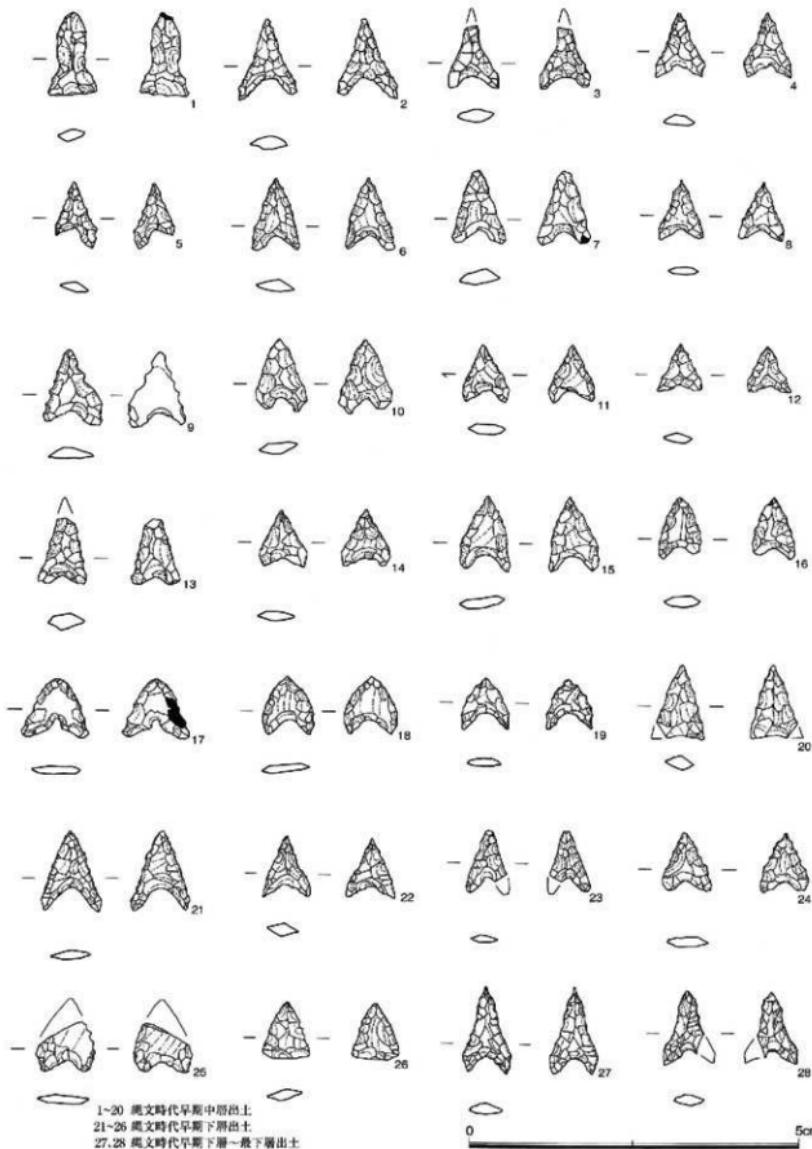


図14 繩文時代早期石鏃

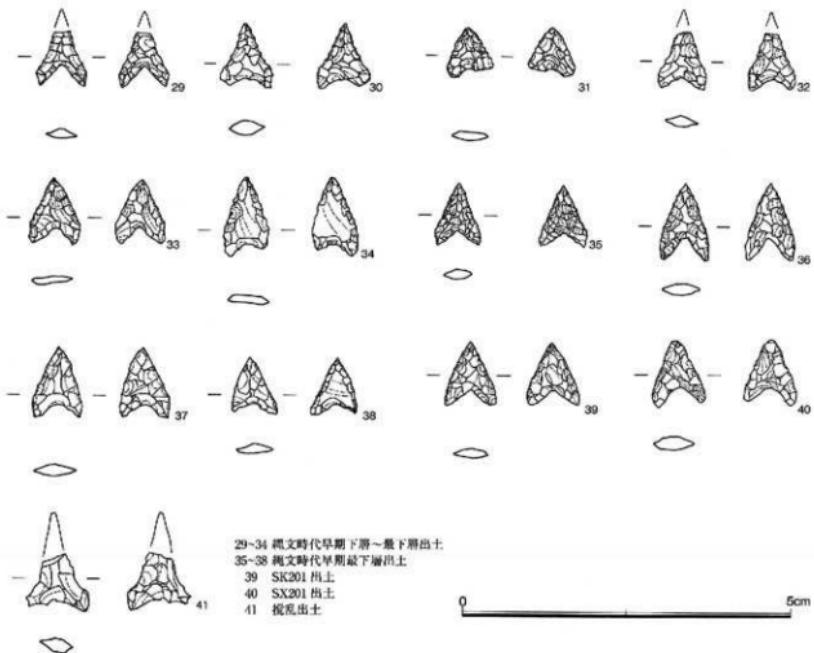


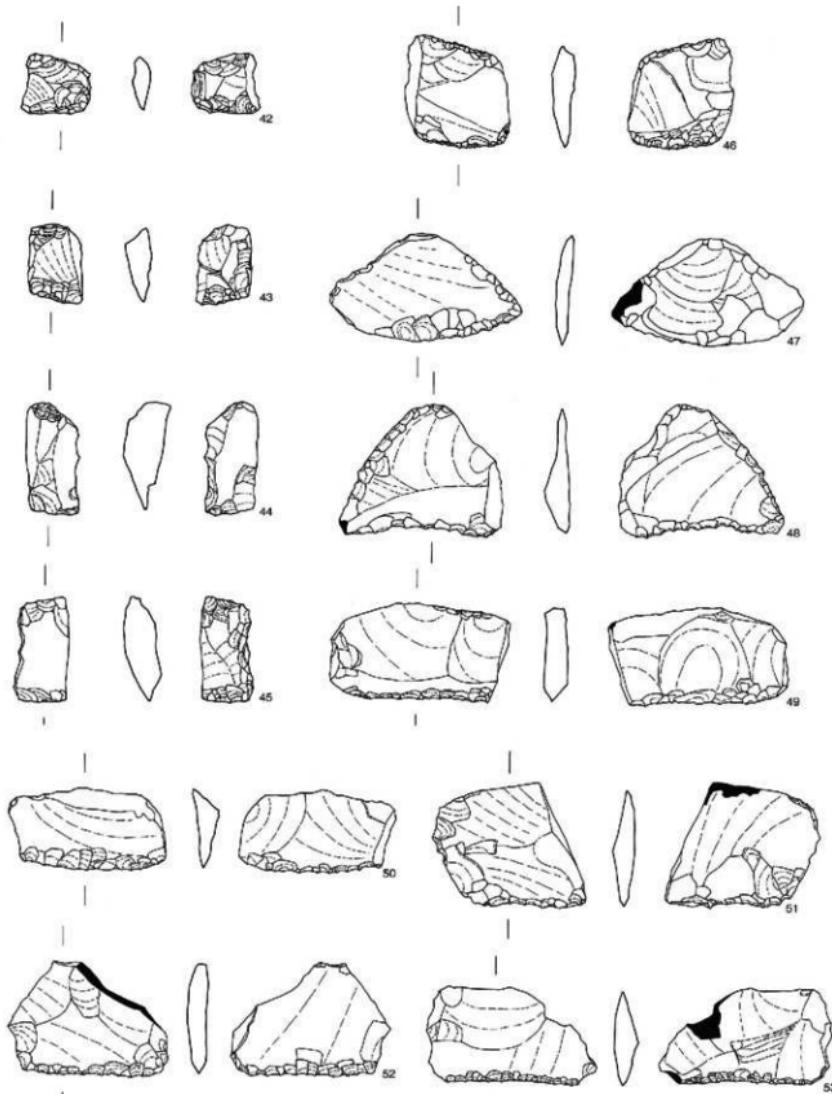
図15 繩文時代早期石器

下層 45~48は平行線文である。この内47~48は口縁部となる。49~50は綾杉文、他の44、51~75は数種類のバリエーションが存在するが、すべて山形文である。この内59~62、64~65、68は口縁部である。65は口縁部外面に刻み目を持つ。北野ウチカタビロ遺跡⁽³⁾、北白川庵寺下層遺跡⁽⁴⁾に類例がある。

下層～最下層 76~78は平行線文、79~82は綾杉文である。以下83~94、96~107は数種類のバリエーションが存在するが、すべて山形文である。102には補修孔が認められる。95は底部であり、先底を呈する。

最下層 111は刺突文が、112は山形文と併に刺突文が認められる。121には線で描く複合鋸歯文が認められる。北野ウチカタビロ遺跡⁽⁵⁾に類例がある。125は底部であり先底を呈する。他の108~110、113~124は数種類のバリエーションが存在するが、すべて山形文である。108には補修孔が認められる。

b 石器 石器41点、楔型石器5点、削器7点を図化した。遺構出土の石器の2点、捜査出土の石器1点を除き、他のすべてが遺物包含層からの出土である。この事実から、前述した捜査出土の石器の1点を除き、すべて縄文時代早期神並上層式の土器に共伴する遺物である事が理解できる。



42、43 良文時代早期中層出土
44 良文時代早期下層出土
45 良文時代早期下層～最下層出土
46 良文時代早期底層出土

47 良文時代早期上層出土
48 良文時代早期中層出土
49~51 良文時代早期下層出土
52 良文時代早期下層～最下層出土
53 良文時代早期底層出土

0 5cm

圖16 良文時代早期模型石器 刨器

他に一部を写真で紹介しただけで図化はできなかったが、石核や剥片も遺物包含層と遺構内から多く出土している。

石器と石核、剥片を含めて、材質はすべてサヌカイト製であり、他の石材は確認していない。

石鎚

41点が出土した。内訳は、中層出土が20点（1～20）、遺構出土が2点（39～40）、下層出土が6点（21～26）、下層～最下層出土が8点（27～34）、最下層出土が4点（35～38）、搅乱出土が1点（41）となっている。

出土した石鎚の半数以上である22点が、中層と中層下面で検出した遺構からの出土である。より下層へと進むにつれて石鎚の出土も少なくなる結果となった。

これらの石鎚は、すべてサヌカイト製である。凹基式の石鎚がほとんどであるが、平基式の石鎚も2点（1、26）だけ含まれる。

重量的には、約0.4グラム、0.5グラム～0.95グラム、1.0グラム以上の石鎚に分類でき、0.5グラム～0.95グラムの石鎚が大半を占める結果となった。

楔型石器

5点を図化した。内訳は中層2点（42,43）、下層1点（44）、下層～最下層1点（45）、最下層1点（46）である。層位により出土量のばらつきは認められない。

これらの楔型石器は、すべてサヌカイト製であり、すべて剥片を使用して成型されている。重量的に42、43は小型品、44、45は中型品、46はより大型品である。

削器

7点を図化した。内訳は上層1点（47）、中層1点（48）、下層3点（49～51）、下層～最下層1点（52）、最下層1点（53）である。

下層でやや出土量の多い傾向が認められる。ただし出土総数自体が少なく、確実な傾向までは理解できない。

すべてサヌカイト製で、両面調整の削器である。

2 注

(1) 綱 伸也「北白川廃寺2」『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』1994 財团法人京都市埋蔵文化財研究所

(2) 前掲（1）

(3) 松田真一・近江俊秀「北野ウチカタビロ遺跡」『奈良県遺跡調査概報 1990年度』1991 奈良県埋蔵考古学研究所

(4) 前掲（1）

(5) 前掲（3）

第3章まとめ

第1節 古墳時代

1 大溝について 今回の調査では、古墳時代の大溝（SD101）を確認している。南北方向に伸びる溝の東側半分の調査であったが、当該調査の西側に接した2次調査の結果と合わせ、幅約5.0mで、深さ約1.5m～1.75mの溝である事実が理解できる。

ほぼ直線的に南北方向に伸びる事実、溝の肩から急斜面となり掘削されている事実から、人為的に掘削された溝である。

大溝の時期については、2次調査では中層から古墳時代後期の須恵器と土師器が多量に出土し、下層から時期不明の土師器が少量出土した結果となっている。

この事実をふまえ、3次調査を実施したが、人件では2次調査の結果を追認する形となった。

大溝の掘削時期は下層出土の細かな土器片が土師器ばかりであり、古墳時代前期に遡る可能性が考えられる。まだ溝が機能していると理解できる中層には僅かだが須恵器片が混じる。古墳時代後期にかけて、溝は存在していた様である。溝の埋没時期は中層上部から7世紀頃の須恵器杯が出土し、当該時期だと理解できる。

大溝の機能していた古墳時代には、1、2次調査でも遺物が多数確認されている。古墳時代後期の集落が周囲に存在していた事は確実であり、この大溝もその集落に関連して掘削された事が理解できる。また、1次調査で布留式土器が確認され、大溝の掘削が古墳時代前期に遡る可能性が考えられる事から、この古墳時代集落の成立も、古墳時代前期に遡る事が考えられる。

溝の性格については明らかでないが、集落に伴う水路、あるいは旧生田川の氾濫源に位置する事実から、排水路として掘削された可能性が高い。

2 遺物について 遺物では大溝の時期を決定した土器以外に、大溝中層から土錘が15点出土している事が特記できる。二宮東遺跡は現海岸線から北に1kmに位置している。漁業にも従事していた事は十分に理解できる。これは二宮東遺跡の集落だけではなく、当該時期の周囲の集落全般に言える事であるが、農業だけでなく漁業にも重点をおいて生活を営んでいたのであろう。

第2節 繩文時代早期

1 造構について 今回の調査では縄文時代早期（神並上層式）の落ち込み、土坑、ピット群を確認している。

今回の調査で確認した落ち込み（SX201）については、不確定ではあるが、竪穴住居である可能性も考えられる。また土坑の他、ピットも多量が確認されている。遺物包含層も含めて、縄文早期土器の多量な出土、サスカイト製の石鎌や楔型石器、削器の他、石核、剥片の多量な出土も確認している。

当該時期の縄文時代早期集落が二宮東遺跡に存在していた事実は明らかであり、今回の調査成果である。

周囲で縄文時代早期の集落は熊内遺跡で大川式の豊穴住居が確認され、雲井遺跡では大川式、神宮寺式の集石遺構や土坑を確認している他、神並上層式の土器も出土している。

二宮東遺跡と熊内遺跡、雲井遺跡は周囲1.3km弱の狭い範囲内に接しており、各集落間で人員の移動も含め、濃密な関係をもっていた事は予想できる。縄文時代早期には、おそらくほぼ同一集団の移動により、時期を違えながら、3集落が造営されていたのであろう。

2 遺物について

今回の調査で出土した遺物は、縄文時代早期上層、縄文時代早期中層、遺構出土、縄文時代早期下層、縄文時代早期最下層と層位的に区分して取り上げた。ただし結果的には土器で確認すると、すべて基本的に神並上層式であり、各層位と遺構出土の土器に時期差は認められない。

今回の調査で出土した土器を観察すると、山形文の脇に刺突文が施される等、神宮寺式のネガティブ文の特徴を留めた土器も存在する。この事実から、神並上層式の中でも古朴を持つ土器は確かに出土している。だが「基本的に神並上層式」と言う以上に、出土土器を細分はできなかった。

文様的には数種類のバリエーションを持った山形文が主流である。今回出土した土器は、個体のバリエーションが多い資料である事が特徴である。他に綾杉文、平行線文の土器も出土している。この綾杉文、平行線文にもバリエーションが認められる。

この平行線文（山形の無い山形文）が今回の調査で出土した事から、神並上層式に平行線文が伴う事が判明した事も調査成果である。

実測No	重量(グラム)	実測No	重量(グラム)	実測No	重量(グラム)
図14-1	1.31	図14-21	0.69	図15-41	1.13
図14-2	0.78	図14-22	0.50	図16-42	2.75
図14-3	0.64	図14-23	0.37	図16-43	3.54
図14-4	0.60	図14-24	0.65	図16-44	5.73
図14-5	0.48	図14-25	0.73	図16-45	6.69
図14-6	0.82	図14-26	0.57	図16-46	10.72
図14-7	1.19	図14-27	0.76	図16-47	8.28
図14-8	0.38	図14-28	0.51	図16-48	14.26
図14-9	1.01	図15-29	0.56	図16-49	18.74
図14-10	0.92	図15-30	0.83	図16-50	10.16
図14-11	0.63	図15-31	0.43	図16-51	10.02
図14-12	0.35	図15-32	0.42	図16-52	11.26
図14-13	1.32	図15-33	0.73	図16-53	11.89
図14-14	0.53	図15-34	0.86		
図14-15	1.15	図15-35	0.49		
図14-16	0.73	図15-36	0.74		
図14-17	0.76	図15-37	0.84		
図14-18	0.64	図15-38	0.38		
図14-19	0.42	図15-39	0.59		
図14-20	1.21	図15-40	0.77		

表1 石器重量計測表



1 1区第1造構面全景（南から）

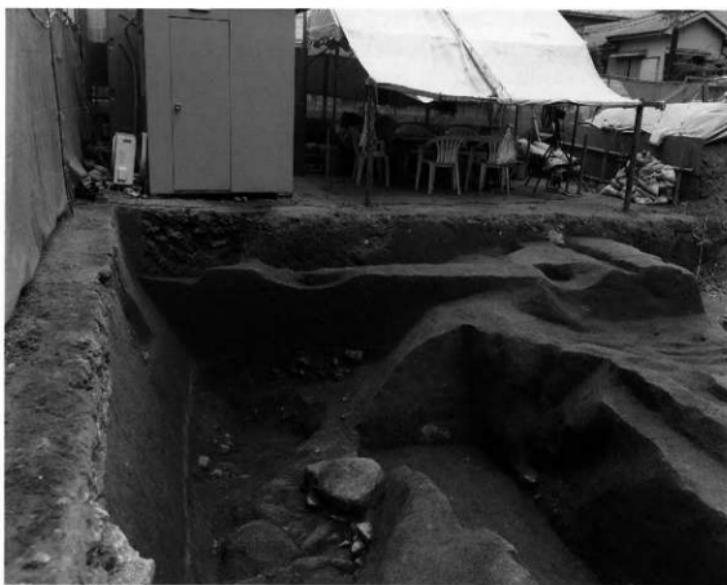


2 2区第1造構面全景（北から）

写真図版2



1 SD101 (南から)



2 SD101南壁土層



1 1区第2造構面全景（南から）



2 2A区第2造構面全景（北から）

写真図版 4



1 2A区北半第2連構面全景（南から）



2 2B区第2連構面全景（北から）



1 2A区東壁土層



2 SX201（西から）



3 SK201（東から）

写真図版 6



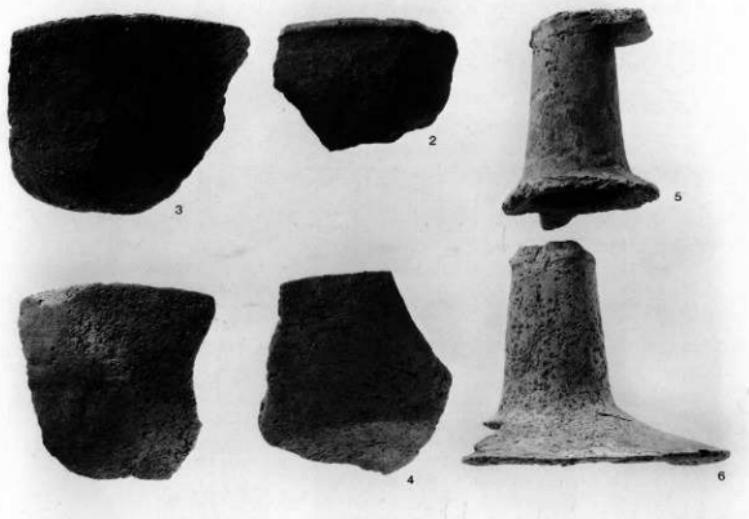
1 SK202 (南から)



2 SK203 (北から)



3 1 A区無遺物層上面 (南から)

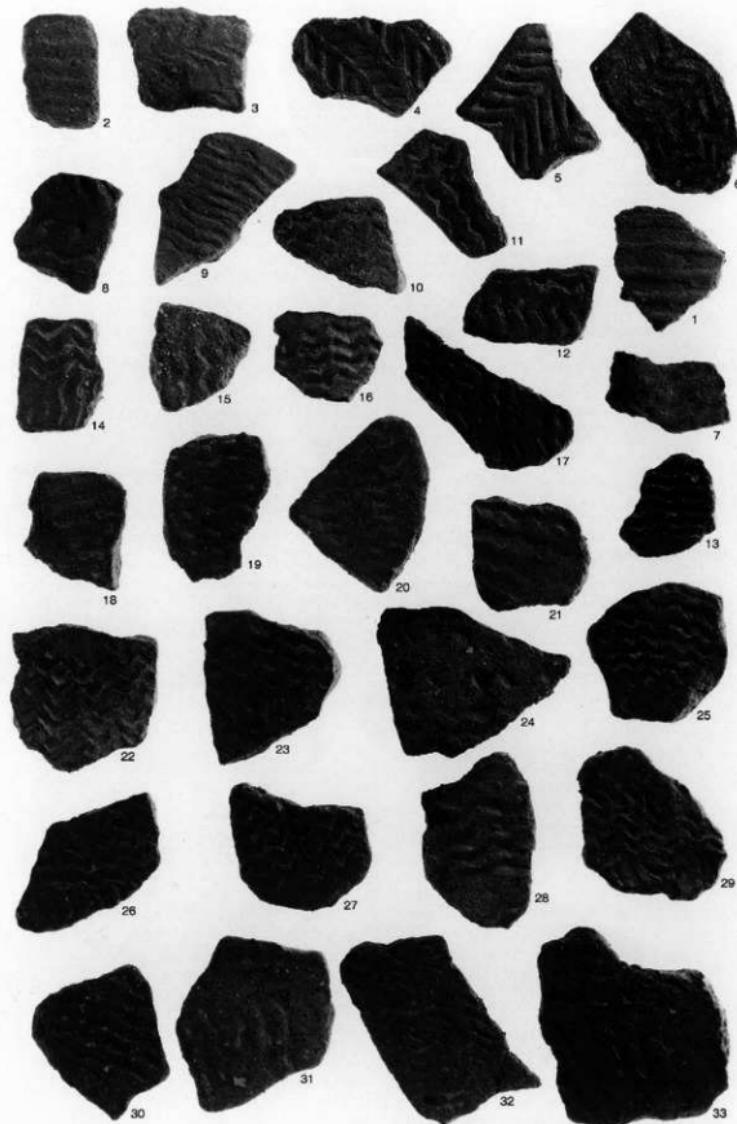


1 SD101出土土篩器

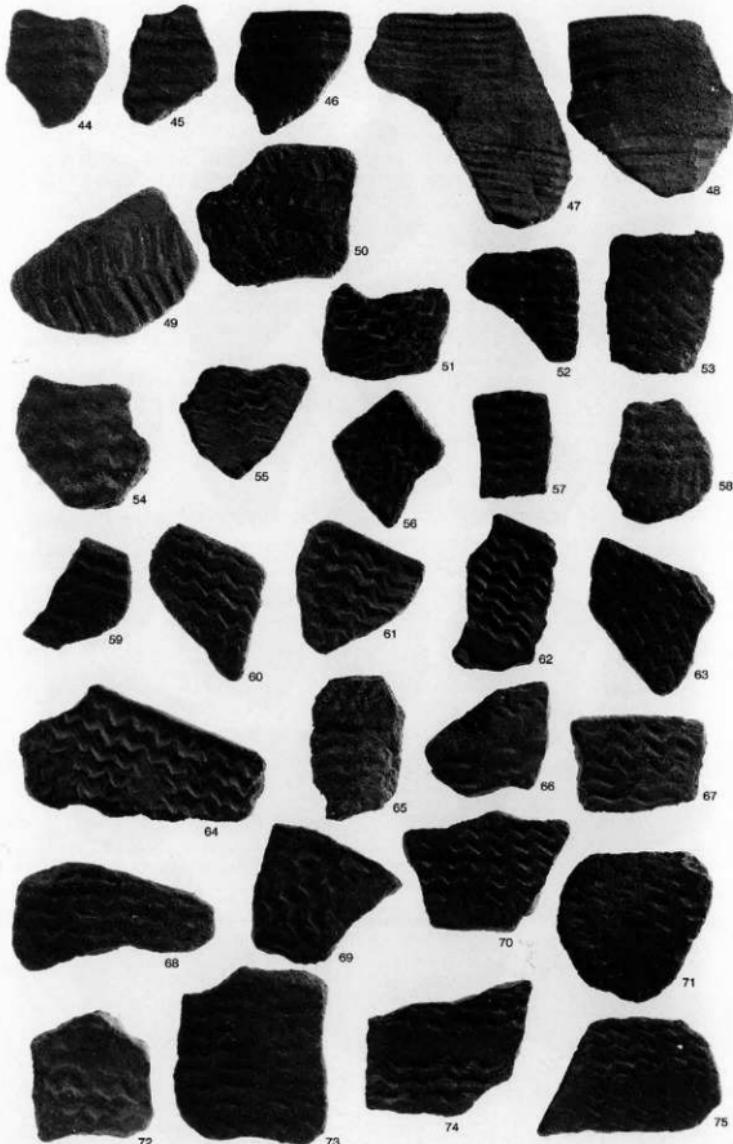


2 SD101出土土鐘

写真図版8

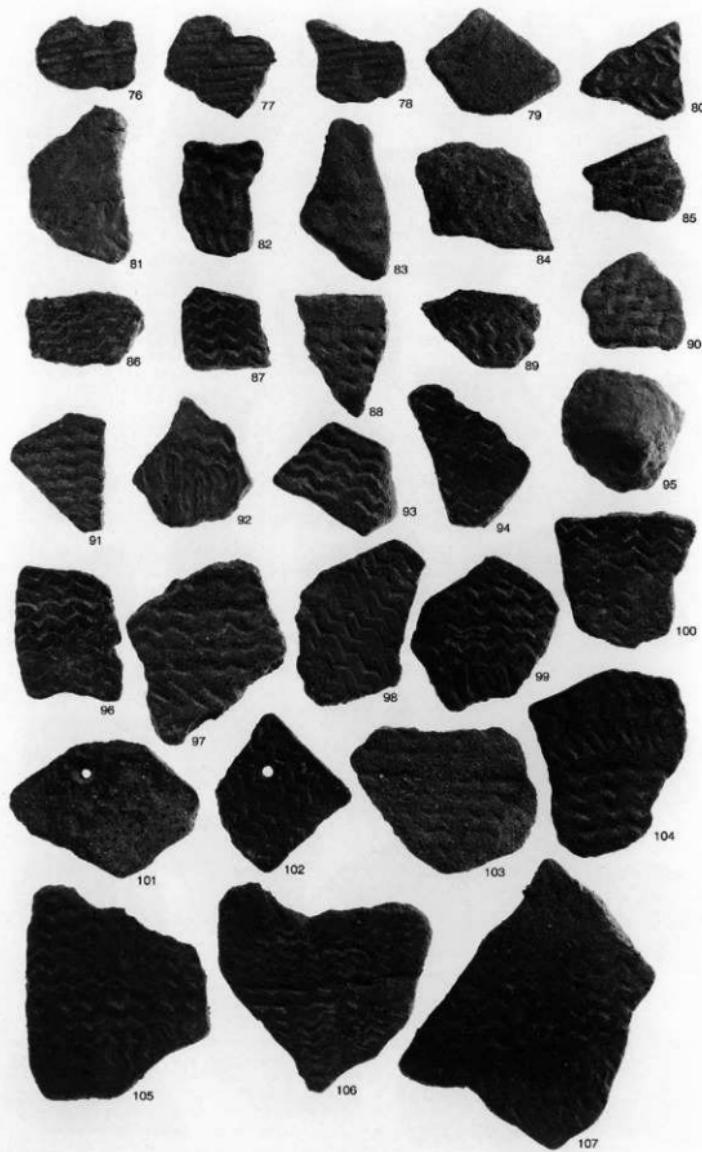


縄文時代早期中層出土土器

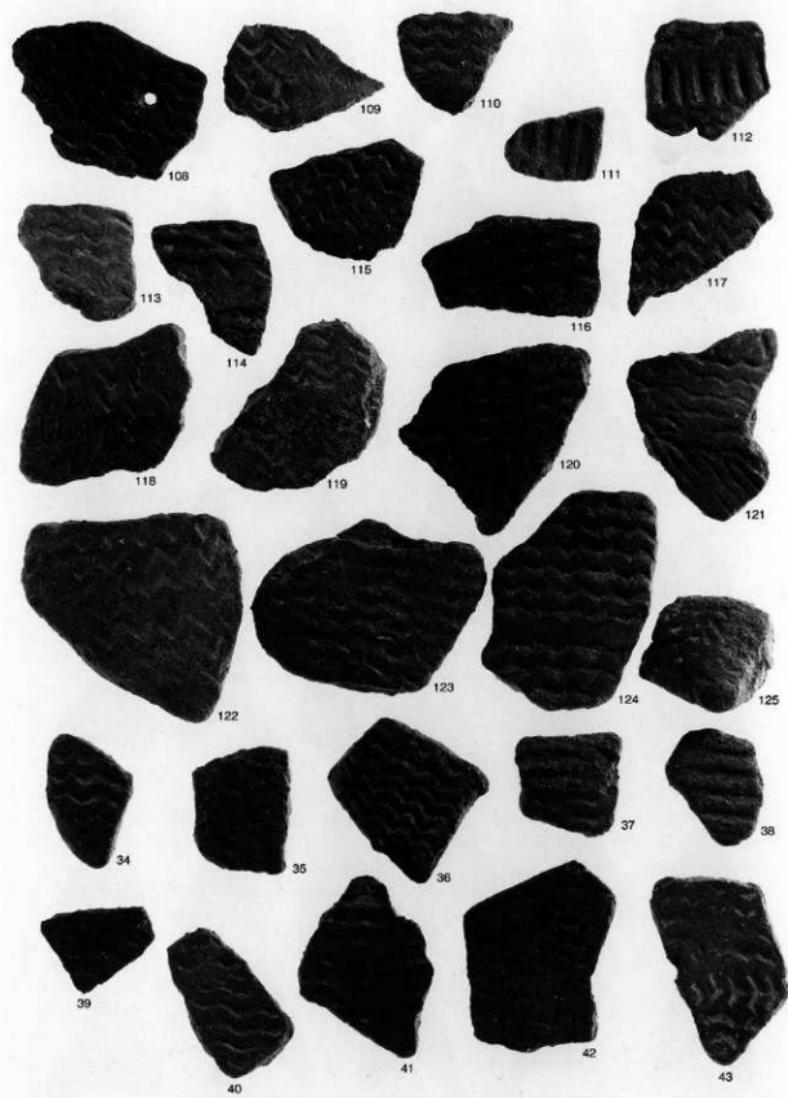


縄文時代早期下層出土土器

写真図版10

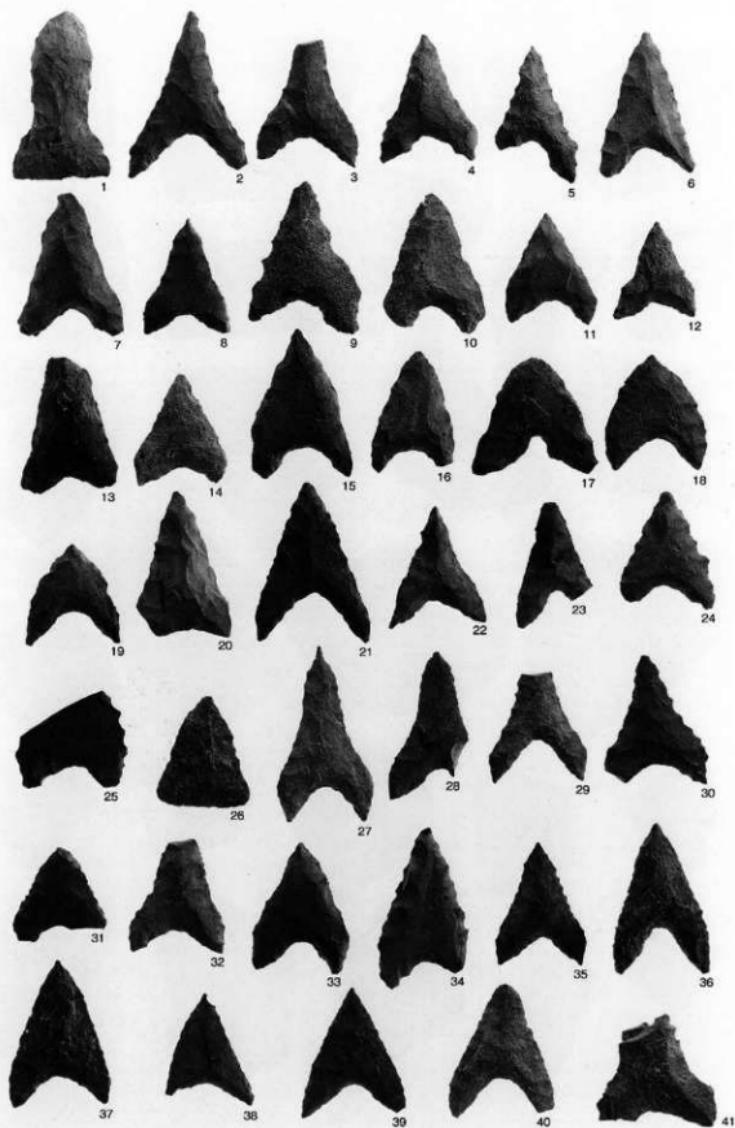


縄文時代早期下層～最下層出土土器

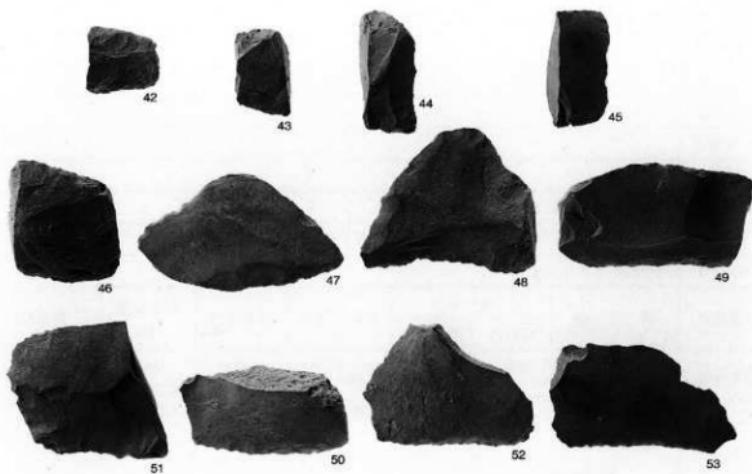


縄文時代早期最下層 邊縁出土土器

写真図版12



縄文時代早期石器



1 繩文時代早期模型石器 削器



2 繩文時代早期下層出土サヌカイト剝片 (一部)

報告書抄録

ふりがな	にのみやひがしいせき だい3じちょうさ はくつちょうさほうこくしょ						
書名	二宮東遺跡 第3次調査 発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	浅谷誠吾						
編集機関	神戸市教育委員会						
所在地	〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号 Tel 078-322-6480						
発行年月日	西暦2010年3月31日						
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)
		市町村	遺跡番号				
二宮東遺跡	兵庫県神戸市 中央区二宮町 1丁目381番6 381番7	28110	3-48	34度 42分 01秒	135度 11分 53秒	20090722 ~20091011	300m ² (約150m ² × 2面)
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項
二宮東遺跡	集落跡	縄文時代早期 古墳時代後期		溝、土坑、ピット		土師器 須恵器 縄文土器 石器	
要約	第2次調査の延長上で古墳時代の大溝の続きを検出した。また二宮東遺跡では初めて、縄文時代早期の集落に伴う遺構を検出し、あわせて遺物も多数出土した事が、調査成果である。						

二宮東遺跡発掘調査報告書

第3次調査

2010.3.31

発行 神戸市教育委員会文化財課
 〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号
 TEL 078-322-6480

印刷 デジタルグラフィック株式会社
 神戸市中央区弁天町1-1
 TEL 078-371-7000

